58年目の結婚記念日

---2022年4月10日---

結婚記念日には妻と二人で花見のドライブに出かけることにしている。58年前に結婚式を行った綾部市の大本教本部も桜が満開だったことを鮮明に覚えている。桜に限らず野の花も、山の草花もこの頃から咲き始めるのである。

8時には家を出たが、車も少なく青空が広がっていてドライブ日和だった。市街地は桜が満開なのに、あるはずの桜の花びらが道路に落ちていないことを不審に思いながら松尾橋を渡り、堤の上を嵐山に向かう頃から花が少ないことに気が付いた。

この冬は寒さが厳しかったというから、開花が遅れていたらしい。北嵯峨に入り、**稀代の桜守**で知られる**佐野藤右衛門**さんの庭園の桜も開花前で、殺風景な中を国道162号を北上すると、やがて山間に入り、上り詰めたところが『**御経坂峠**』で、下りにかかると間もなくヘアピンカーブの正面に、山腹一面をミツバツツジが覆ったスケールの大きな群落が出迎えてくれた。車を止めるところもないので通り過ぎたが、大勢のカメラマンたちはどうやって構図をまとめていたのだろうか。清滝川を挟んで300mも遠くの絶景では、撮りようも思いつかないのである。

カメラを取り出すこともなく、長いトンネルを通り抜けると京北周山町の中心部『**道の駅ウッディー京北**』だったが、まだ開店前なのでトイレを借りただけで今度は国道477号線を上黒田に向かった。百年桜も黒々としていて蕾は更に硬く、大布施の手前の大きな枝垂桜も蕾は黒く小さく、開花までは更に数週間を要するだろうと思われた。

ここからは府道38号線で、定期バスの終点である広河原からは、冬季閉鎖が解かれて間もない佐々里峠への登りにかかった。すると、山中の高みに白い花が見えるではないか。佐々里峠まで登って見ると、その花は『**タムシバ**』だった。

モクレンの仲間で、コブシの裏日本型と言われているが、清楚で大きくて私のお気に入りの春の花である。ここで初めてカメラを構えて写真を撮る気になったのである。路傍には汚れた雪がしっかりと残っていた。厳しかった冬の名残だろうか。

美山町に入って、佐々里・白石と由良川に沿って下ってゆくと、美山町田歌に出て民家が多くなる。田歌とは美しい名前なので、その名の由来を知りたくなるのであるが、不幸にして私は知らない。八坂神社や洞雲寺もあり、昔はバスの終点だった。

田歌祇園橋を渡ると右側には広い水田が広がり、左側は友人のN村さんの山遊びの雑木林で、ゆるやかな小山である。この辺りは山野草の花や山菜の多い所で、毎年コゴミやワラビ・ワサビ・ウド・コシアブラ・タラの芽など頂いてきた。山遊びの雑木林には、イワカガミの大きな群落がいくつもあり、イカリソウなども多いのであるが、今年は蕾さえなかなか見つからなかった。

ショウジョウバカマ(ユリ科)

ショウジョウバカマとフキノトウ(キク科)

イワカガミ(イワウメ科)の蕾はまだ堅い。

イカリソウ(メギ科)---白い花を含めた**大群落**があるのだが、咲いていたのはこれだけ。やはり開花が遅れているのかな。

何処までも続くイワカガミの大群落。開花が待たれる。

ウバユリ(ユリ科)---花期は夏

更に由良川に沿って下ると、美山町北の『**かやぶきの里**』に出る。桜が満開だった。ここは美山町で一番の観光のスポットであり、車や観光客で溢れかえっていた。トイレを借りただけで少し戻り、文化村への沈下橋から河原に降りて写真を撮った。

杉の植林地や山腹から稜線にかけてぽつぽつと白く見えるのは**タムシバ**だろう。意外に数が多い。
もう間もなく昼になるというのに、コンビニで買ってきた弁当を食べる日陰がどこかに無いだろうか。
安掛の『**道の駅 美山ふれあい広場**』も車と人であふれかえっており、素通りして向かった大野ダムが近くなった頃、道端に『**日本最古の農家住宅・石田家住宅**』の案内板が目についた。縁側をお借りして弁当を開くのをイメージして寄ってみたが、縁側は無く、おまけに閉鎖されていた。すぐ近くに『**大原神社**』があったのを思い出して、車を置いて石段を登ってゆくと本殿の前に舞台があり、誰もいないのでお借りすることにした。満開を過ぎた桜吹雪を見下ろしながらくつろいだ気分で弁当をいただくことが出来た。ふと気が付くと、境内の樹(おそらく榊)に大きな瘤が出来ているではないか。

こんな瘤を最近見たことを思い出した。確かあれはシラカシじゃなかったかな。小倉山荘の庭だった。

『**大原神社**』は、義母の実家のある福知山市三和町川合大原にある社が有名であるが、京都市内にもあるらしい。最近場所感覚がおかしくなった妻は、「いつの間に三和町に来たん?」と言っていた。国道 27 号線に出たところの**和知町**には、夫の三回忌を迎えて間もない妹が一人で棲んでいる。田舎のこととて話し相手になる友もなく退屈な日々を送っているそうで、近くを通るときには線香をあげることにしている。

(2022.04.15 記)